

# ICMIF100周年記念ローマ総会 ヤングリーダーズプログラム参加報告

日本共済協会 調査研究部 すすき たかや  
鈴木 隆也

2022年10月25日から27日にかけて、国際協同組合保険連合（ICMIF）のローマ総会に合わせて、ヤングリーダーズプログラム（以下YLP）が実施されました。

本稿では、事前準備の取り組み、YLPの実施内容、帰国後の国内参加者報告会などについてお伝えします。

## 1. はじめに

国際協同組合保険連合（ICMIF）は、会員団体における将来のリーダー候補者の育成を目的として、18歳から35歳の若手職員を主な対象に、ヤングリーダーズプログラムを実施しています。YLPは、他のICMIF会員からの学びと協力の機会を提供するとともに、世界中のICMIF会員の最高経営責任者（CEO）、上級管理職、または業界内外のリーダーの方々とネットワークを築く機会を提供しています。

今回のローマ総会におけるYLPは、ロンドン総会（2017年）、オークランド総会（2019年）に続き3回目の実施となり、世界18カ国から61名が参加しました。日本からはJA共済連1名、こくみん共済 coop<全労済>6名、日本再共済連1名、コープ共済連5名、日本共済協会1名の合計5団体、14名が参加しました。

## 2. 事前準備

参加者個人、各組織の事前準備以外にも、参加者には、ローマ総会・YLPの情報や、ネットワークづくりのためのプログラムが事前に提供されました。主な内容は、次のとおりです。

### (1) ICMIF関連

#### ① バーチャル導入セッション

YLP主催側リーダーであるBen Telfer氏より、Zoomによるウェビナーが開催されました。ICMIFの組織概要、YLPの内容、ローマ総会アジェンダの説明等の情報提供が行われました。このウェビナーを通じて、ローマ総会・YLPに参加するイメージをつかむことができました。



YLP全参加者（YLP歓迎レセプションにて）

② ICMIFからのメール

Telfer氏より、ローマ総会・YLPに関する最新情報とアドバイスが、メールによって提供されました。メールは開催直前まで発信され、万全の準備を整えることができました。

③ LinkedIn

世界で最もメジャーなビジネス向けSNSであるLinkedInを活用した、参加者間の情報共有の場が設けられました。自己紹介や関心事について共有し、国内外のYLP参加者とネットワークを構築することができました。

④ ICMIF主催ウェビナー

ICMIF会員向けの各種ウェビナー（録画視聴可能）が提供され、ローマ総会の予備知識となる世界の保険・共済の動向について情報収集を行いました。

(2) 日本共済協会による事前交流会

初めての取り組みとして、日本共済協会主催による、日本国内参加者の事前交流会が2022年8月26日に開催されました。

交流会は、オンライン参加も含めたハイブリッド方式により、主として1グループあたり3~4名のグループワークを実施し、参加者に参加目的を考える機会が提供されました。また、AOA事務局と過去のYLP参加者から、各種情報やアドバイスの提供があり、総会に臨むヤングリーダー（以下YL）の後押しをするとともに、YLの相互触発を促し、交流を深める契機となりました。

3. ヤングリーダーズプログラム

YLPは10月25日から27日までの3日間に行われ、下記のスケジュールにより実施されました。

(1) ネットワーキング関連

プログラム冒頭にアイスブレイクが実施されたことで、参加者間の緊張がほぐれ、プログラムに効果的に取り組むための下準備ができました。また歓迎レセプション、懇親会が開催され、和やかな雰囲気のもと、参加者はICMIF会員の一人であることを実感し、YLPの目的の一つでもあるネットワーキングに取り組みました。

(2) トレーニング

「大会から最大限の価値を見だし、ヤングリーダーの価値と影響力を最大化する」をテーマにトレーニングが実施されました。

トレーニングでは、「思考モデル」「異文化理解力（カルチャー・マップ）」および「チームで複雑な問題に取り組む際の意味決定」等の講義とグループワークが実施され、リーダーとしての重要なコミュニケーション能力の醸成に資する内容でした。

(3) CEOとの円卓座談会

CEOとの円卓座談会は、YLPのメインであり、会場には合計10卓の円卓が用意されました。各円卓にはCEO1名とさまざまな地域からのYL6~7名が着席し、朝食を取りながら、

日時	内容
10月25日 15時~17時	<導入セッション> アイスブレイク、トレーニング1 等
10月25日 18時30分~19時30分	<歓迎レセプション> ネットワーキング
10月26日 7時30分~8時30分	<朝食セッション#1> トレーニング2
10月26日 18時~19時	<懇親会> ネットワーキング
10月27日 7時30分~8時30分	<朝食セッション#2> CEOとの円卓座談会

トップリーダーとしての心得やYLが抱えている課題等について、CEOとYLが自由に意見交換を行いました。

私が参加した円卓では、次のような流れで座談会が行われました。

円卓のメンバーは、National Farmers' Union Mutual (NFU M) のグループ最高経営責任者 (CEO) であるNick Turner氏とYL6名 (日本からJA共済連 長谷氏と私の2名、カナダから1名、フィンランドから1名、フィリピンから1名、アメリカから1名) でした。

Turner氏は、2021年より現在の役職に就き、NFU Mグループのトップリーダーとして、グループ全体の経営戦略の策定と実行を担っています。NFU Mは、1910年に設立されたイギリスの相互保険会社で、農業従事者を対象に生命・損害保険業等を営んでおり、現在ではイギリスの農場の3/4に保障を提供しています。

まず座談会冒頭、YLが自己紹介を行いました。このやり取りで、私たちはTurner氏の強いリーダーシップを感じ取ることができました。

その後Turner氏の自己紹介をはさみ、YLとの意見交換が行われました。この中で私はTurner氏に対して、NFU Mという大きな組織の中で、リーダーとしての考えをどのように職員に伝えているか聞いたところ、「リーダーはトップダウンで組織を動かすべきではない。職員をコントロールしようとしてはダメだ。組織の目的 (パーパス) に向かって、職員が動くように仕向けていくのが役割である」との回答をいただきました。職員の意見を吸い上げ、それを経営者として実現していくというTurner氏のリーダーとしての姿勢に大きな感銘を受けました。

ここで紹介した以外にも、他の円卓も含め、参加したすべてのYLにとって、今後につなが

る多くの気づきを得ることができた大変有意義な機会となりました。



円卓座談会の様子

#### 4. 日本共済協会による参加報告会

ローマ総会・YLP参加より1か月半が経過した2022年12月16日に、改めて各自の活動の振り返りや、団体を越えた日本からの視点による振り返りを行うとともに、参加者同士の交流を更に深める機会として、前回のオークランド総会に引き続き、日本共済協会主催による報告会が開催されました。

各参加者のコメントから抜粋した内容を紹介します。



日本からのYLP参加者

氏名(会員団体名)	コメント
長谷 智志 (JA共済連)	<p>ICMIF総会全体を通じて、世界の協同組合／相互扶助組織における価値観、課題認識、取り組み内容に強く共感しました。特に、Sustainability、Resilience、Innovation、Future of works等の主要トピックスの議論をふまえ、改めて「JA共済はどうあるべきか？」について、同僚等と議論を深めていきます。</p> <p>また、YLPでのリーダーシップのあり方に関する学びをふまえ、これまでの自分自身の立ち振る舞いを省みながら、これから組織を代表するリーダーになれるよう一層精進していきます。</p> <p>最後に、国内外問わず、同じ価値観を共有できる仲間がかけがえがなく、今後も自身がICMIFの活動に参加していくことはもちろん、より多くの職員が参加するよう呼び掛けていきます。</p>
高橋 顕人 (こくみん共済coop<全労済>)	<p>“積極性”を意識して今回のYLPに参加・準備をしました。</p> <p>ICMIF会員組織であること、協同組合で勤めていることに誇りを持つ世界の方々から刺激を受け、当会で働いていることを改めて誇りに感じました。今後も世界のヤングリーダーと切磋琢磨し、当会を盛り上げられるようなリーダーになりたいと思いました。</p> <p>また、今回のYLPで学んだことを共有し、私のようにチャレンジしたいと思ってもらえる若手を多く作っていきたいと思います。</p>
水野 愛 (こくみん共済coop<全労済>)	<p>「協同組合としての存在意義」をテーマにICMIF総会ならびにYLPへ参加しました。保障を提供することは課題解決手法の一つであり、予防・防災・インパクト投資などSDGsの取り組みにもつながる活動をビジネスの中心においていることこそが、株式会社とは違う協同組合組織の存在意義であることを実感できました。</p> <p>私自身も協同組合組織の1人として、そのコミュニティの中で必要とされていること、さらには解決しなければならない課題に向き合い事業と運動を進めていきたいと思っています。</p>
入江 真理子 (こくみん共済coop<全労済>)	<p>ICMIF総会／YLP参加を通して、レジリエンスやSDGsに向けた取り組みが加速する今こそ、共済組織が世界をリードしていく存在であることを実感しました。</p> <p>また、目標到達に向けて協力し合える貴重な関係にある世界的ネットワークの一員であることを非常に心強く感じました。</p> <p>この経験を糧に、VUCA（社会あるいはビジネスにおいて、不確実性が高く将来の予測が困難な状況であることを示す造語）の課題に正面から向き合う新時代の共済の担い手として、ICMIFとともに持続可能な社会の実現へと組織の舵を切る存在を目指していきたいと思っています。</p>
鶴岡 純 (こくみん共済coop<全労済>)	<p>人と人とのつながりが大きな化学反応を起こすと感じました。働き始めると、限られた人とのしかかわりがメインになりがちですが、多種多様な方々とのつながりから、新たな視点での貴重な情報を得られると実感しました。</p> <p>「長期的な目標や目的を持ち、実現に向けて一歩ずつ成長していくこと」を決意表明とします。ICMIF総会やYLPに参加してよかった、多くのことを学べたと満足するのではなく、小さなことでも日々の行動を変えていきます。</p>

氏名(会員団体名)	コメント
阿部 慎平 (こくみん共済coop<全労済>)	<p>ICMIF会員の気候変動やネットゼロといった持続可能性に向けた課題に対し真摯<sup>しんし</sup>に向き合う姿勢に最も刺激を得ました。まさに目的を持ってリードすることが体现されており、日本の協同組合としての目的は何か改めて考える機会となりました。</p> <p>また、国内の協同組合との交流も財産となっています。持続可能な社会づくりへ連携した取り組みが実現できるようこれから業務に励んでいきたいです。</p>
岩崎 祐希 (こくみん共済coop<全労済>)	<p>本大会では、参加前に想定していた範囲を大幅に超える学びがありました。参加を終えた今、視界が開けた気分です。</p> <p>「共済・協同組合ができることは想像以上にある。何が取り組むべき課題で、それに対して何ができるのか。私たちはともに模索し、より良い社会を実現していける」。その組織風土に大きな誇りと希望を感じました。</p> <p>実務の現場でこの感覚を退化させることなく、枠組みにとらわれない柔軟な頭と心を持ち続けたいと思います。</p>
川井 譲 (日本再共済連)	<p>今回YLPに参加して最も印象的だったのは、出身国や勤務年数に関わらず、多くの参加者が自社の経営について当事者意識を高く持ちながら自身の業務にあたっていたということです。必然的に熱のこもった議論になることが多く、英語によるコミュニケーション能力の重要性を痛感しました。</p> <p>弊会では出再業務で多くの海外再保険会社とも関係を有していることを踏まえて、今回のYLP参加を機に基礎的な業務内容だけでも英語で意思疎通できるよう努めたいと思います。</p>
笹川 英之 (コープ共済連)	<p>ICMIFローマ総会は目的をもってリードするというテーマだったことから、特に興味があったデータとDXについての記事をナレッジハブやインターネットなどから学び臨みました。</p> <p>総会では自分がこれまで考えていた保険の役割を超え、日々の生活だけでなく、自然災害や教育などに至るまで、よりよい未来を創るために限りあるエネルギーや資金、人材をいかに有効に使うかについて話し合われました。</p> <p>データやDXの活用も新しいニーズの発見や組合員とのつながりを強めるための手段であり、預かっている掛金を組合員の生活向上に還元できるように、これらの推進に携われたらと思います。</p>
小林 正典 (コープ共済連)	<p>今回、ICMIFローマ総会に参加したことで、より一層、協同組合団体であることの意義・価値・目的を再認識できました。改めて職員に協同組合で働くことの意義や目的を再確認する機会を作れたらよいと感じます。</p> <p>特にコロナ禍に入協してきた1~3年目の職員からすると、目先のコロナ共済金支払に忙殺される日々を過ごし、まだイメージできていない部分があるかもしれません。そういったギャップを埋め、交流する機会があればよいと感じました。</p>
青西 なお (コープ共済連)	<p>総会の本セッションでは、「災害発生を極力減らす／被災させない」強い意志を目の当たりにし、自組織では何ができるだろうと考えさせられました。</p> <p>また、YLPにて助け合いを体现しているダーン財団CEOアヒラ氏の話聞き、同世代の参加者と感動を共有できたこと、総会当日や前後に国内の他団体の職員とつながりを持って、協同組合や共済について話せたことは、大きな財産です。成長したいと痛感させられた機会に感謝し、学びを深めていきます。</p>

氏名(会員団体名)	コメント
竹内 ゆりな (コープ共済連)	<p>各国組織による熱いプレゼンを聞き、気候変動など世界的課題に対する切迫感を肌で感じました。自組織がこれから取り組めることが多いと知り、さらに相互扶助組織が一丸となれば強い影響力になり得るという発言に今後の可能性を感じました。</p> <p>準備段階も含め、すべて大会への参加を決めなければ知り得なかった刺激であり、視野をぐんと広げるよい機会だったと思います。広げられた視野を失わないよう自分自身も発展し続けたいです。</p>
藤本 一 (コープ共済連)	<p>共済・保険を主軸とする協同組合・相互会社組織が、社会に果たす役割について改めて気づかされ、世界の潮流について知ることができました。</p> <p>また、YLPでは、組織やチームにおける理想のリーダー像について学ぶことができ、海外の若手リーダーとの交流を通して多くのインスピレーションを得られました。</p> <p>総会全体を通して、われわれ相互扶助の組織は、社会的意義の高い事業を営んでいることを改めて腹に落とすことができたと感じています。今後も、保障を必要とする一人でも多くの組合員にコープ共済を届けていくことを胸に、まい進していきます。</p>

## 5. 所感 (むすびに代えて)

今後参加されるYLの一助となることを願ひ、所感を記します。

YLPへの参加を通じて、私たちYLは多くのものを得ることができました。

### (1) CEOとの円卓座談会

世界的リーダーである各CEOからの示唆に富んだ発言により、多くの気づきを得る貴重な機会となりました。またCEOと直接、意見交換をすることができたという経験自体が、何事にも代えがたく、大きな財産となりました。

### (2) ICMIFの組織風土

ローマで私たちが多くのものを獲得できたことは、主催団体であるICMIFのおかげです。ICMIFという“相互扶助”を体現した、あたたかい組織がローマで私たちを受け入れてくれたからこそ、私たちは活性化できたものと思います。

### (3) 日本のYLの強いつながり

私たちは、“ローマ”という大きな目標を掲げ、ともに手をつなぐことができました。日本のYLの誰もが、頼もしい“同志”を発見できたと思います。このことも大きな財産です。また、強いつながりを生む契機となった日本共済協会主催の事前交流会の導入は、報告会と合わせて日本の共済団体の交流の場として、大きな前進となりました。若手職員というボトムアップによる、共済団体をつなぐ試みとして事前交流会を継続開催することで、“共済の未来”へとつなぐことができればと思います。

今回のYLPの一連の活動を通じ、多くの方より、助言・協力をいただきました。事前交流会等の各団体事務局の方々、YLPのOB・OGの方々、そして私自身の参加について背中を押してくださった方々に、感謝申し上げます。